「今日の説教、聴き手のために」　2009/2/8　明治学院教会(144)

（このプリントは毎週作っているものです）　岩井健作

「悲しむ力、喜ぶ力」　ローマ１２：９～１３

「喜ぶ人あと共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（15）

1、新約聖書の７つのパウロの真筆の手紙には、前半が信仰の理論、後半が実践への勧めという構造がある。ローマ（1-11,12f），ガラテヤ（1-4,5f），テサロニケ（1-3,4f）、フィリピ（1-3,4f）。建築に譬えれば、構造理論と意匠設計。その全体が「設計」であるなら、教理と倫理の全体が「福音」であろう。「すべて良い木は良い実を結ぶ」（マタイ7:16）とある。

2、ローマ９節－１３節は、主として教会員同志の間の在り方。「愛には偽りがあってはならない」。この「愛」には定冠詞がついてるから、「（神の）愛は偽らない」が直訳。神の愛が働いているあなた方の「愛」には偽りがあってはならない。いやあるはずがない。神の愛が働く「愛の生き方」とはそういうものだ、と語る。「偽りのない愛」（コリⅡ6:6)は初期教会の最も大切な福音の結実であった。外の世界が以下に偽りで塗りかためられた世界であったかを想像する。

3、１０節～１３節は、１０の勧めが、一息に語られる。私どもはこの言葉で、思い起こす事のできる、聖書の言葉の証人を、歴史の中に与えられている。それは大きな遺産である。例えば、誰々は（祈りの人だった）・・・・。「貧しい聖徒」とはエルサレムの教会のこと。異邦人教会でるるローマの教会が、自分達の信仰理論（信仰義認）だけで「強い教会」に成るのではなく、支援に取り組む事でエルサレムの教会が担ってきた信仰の歴史的遺産につながる貴重な機会なのだ。「貧しさ」への援助は、共に神の恵みにあずかることとだ、とパウロは力説する。現代でも援助は決して一方的なものではない。「旅人をもてなす」は、寄留の他国人に宿を貸す旧約の伝統であった（申命記10:18-19）。

4、１４節以下は、教会の内部から外部に対する関わりとなる。信仰を異教社会で貫けば、迫害者とぶつかる。イエスの山上の説教の言葉「敵を愛し、迫害するものの為に祈れ」（マタイ5:44）が切実の思い起こされている。「呪ってはならない」「祝福を祈れ」。イエスの振る舞いを凝視する以外にこの言葉は聞けない。いわゆる規範としての倫理、戒律、律法では無力だ。喜びと悲しみは、人間の心の、最も、具体的で深い表現である。イエスの振る舞いそのものである。愛する弟子ラザロの死に直面して涙を流した（ヨハネ11:35)。カナの婚礼の席では、味のよいブドウ酒をもって一座を祝福された（ヨハネ2:1-12）。今の世の中、毎日、悲しい事でいっぱいだ。悲みとは何か。人間の心が通わない事。関係の喪失。それは「神」とは「関係そのもの（愛）」であるからだ。悲しみと喜びのあるところに神はいまし給う。「悲しむ力」は神そのものの力である。十字架のイエスの存在そのものの力である。そこに預る事が逆説的に喜ぶ力となる。

4、かつて新聞の投書で読んだ「お葬式にトランペットを吹いた娘さんの話」の「悲しむ力」の自由さが、心に残っている。